

書 評

浮田 典良 編

『日本の農山漁村とその変容——歴史地理学的・社会地理学的考察——』

大明堂 1989年6月

A5判 445ページ 5,150円

農山漁村に関する研究は、日本の地理学の分野の中でも最も長い伝統をもち、多くの業績を蓄積してきた。本書はそのような伝統に、さらに輝かしい業績をつけ加え、今後のこの分野の発展の方向を示唆するものである。

編者は周知の通り、農山村の地理学研究者として現在の日本を代表する1人であるが、編者の還暦を記念して、編者と研究上関わりが深い26名が執筆したものである。しかし、この種の出版物によくみられる自由なテーマを扱った献呈論文の寄せ集めという形式ではなく、「日本の農山漁村とその変容」という課題にそって執筆された25篇に、編者の序論を加えて編集されたものである。序論を含めて、研究動向や手法を扱った3篇、村落の形成や社会・経済的構造、土地利用や景観の復元やその変化過程の分析を試みた歴史地理学的・社会地理学的研究11篇、第二次世界大戦後の開拓やその後の経済の高度成長期前後までの村落の変容とその条件について主に検討した8篇、そして現代の村落の動向に焦点をあわせた4篇の順で配列されている。

ここで26篇すべてについて内容を紹介することはできないが、それぞれの論文と執筆者は次の通りである。

序論：日本の農山漁村とその変容(浮田典良)

第1章：村落変化の研究動向と問題点(青木伸好)

第2章：作物結合の概念と日本における適用の問題点(有蘭正一郎)

第3章：讃岐国善通寺領の土地利用と境域(金田章裕)

第4章：富田林新堂村の集落プラン——寺内町のプランを導入した村——(水田義一)

第5章：奈良盆地南部における近世村落の形成と村落のまとまりに関する一考察(藤田佳久・大鹿寿)

第6章：会津藩における藩政村の規模と集落構成(五十嵐勉)

第7章：五箇と栗田郡——ある村絵図の紹介と近世末期の景観についての覚書——(金坂清則)

第8章：条里地帯における近世郷のまとまりについて——肥前国小城郡の場合——(南出真助)

第9章：近世後期における肥後藩北部地域の農業構造——「中村手永稼穡調査」の分析を中心として——(久武哲也)

第10章：明治後期の北海道農漁村における日用物質の供給形態——(山田 誠)

第11章：北海道藍の地域的展開(平井松午)

第12章：東北日本における農村家屋の発展様式——北西ドイツとの対比における地域特性把握の試み——(杉浦 直)

第13章：大正期近江盆地における農業水利の地域性——『滋賀県農家ノ水利及土地調査書』の分析(1)——(野間晴雄)

第14章：越前海岸の二つの漁村(島田正彦)

第15章：丹波山地における村落の空間構成と社会構造——兵庫県多紀郡西紀町本郷区の事例——(林和生)

第16章：村落墓地の規模について——淡路島を例として——(八木康幸)

第17章：近畿内帯山地における廃村現象とその自然条件についての分布論的考察(坂口慶治)

第18章：中部九州の火砕流台地と伝統的環境利用(小林 茂)

第19章：八重山諸島における戦後の開拓地——石垣市平野地区を中心として——(飯田耕二郎)

第20章：隠岐牧畑の変貌——知夫里島における個人牧場の展開——

第21章：宮崎県における開墾地移住の展開と実態——深田農場の事例を中心に(出田和久)

第22章：滋賀県の圃場整備——第1報——(足利健亮)

第23章：大阪府下における中核的農家の動向に関する一考察(正木久仁)

第24章：大都市圏縁辺部農村における日常生活圏——京都府相楽郡加茂町の事例——(藤井 正)

第25章：農村女性の行為空間に関する社会地理学的考察——簸川平野の事例をもとに——(松田隆典)

史料や古地図を駆使した伝統的な歴史地理学的研究から、現代社会を行動論的視点より解明しようとした研究までさまざまなものがあり、それぞれにひかれるものがあるが、とくに評者が興味をもった研

究の内容を要約することにしよう。

序論では、農山漁村とは住民が主として第一次産業に従事している集落であるが、それを単なる産業からのみではなく、それが営まれている場や営んでいる主体に注目し、さらに農林漁業以外の問題をも広く含ませながら検討するという本書の意図について述べている。また、農山漁村の諸相を動的なものとして捉え、現代的課題を発生や起源にまでさかのぼり、さらに現代に至るまでの変化に着目する歴史地理学的視点や人間の基本的生活行動を念頭に置く社会地理学的視点から検討するとしている。そしてこれまでの日本の農山漁村の研究動向を、地域把握のスケールから検討すると、相対的にマイクロなスケールのものが多く、近年その傾向がますます強くなってきたことを指摘している。

第1章「村落変化の研究動向と問題点」で青木伸好は、現代の村落の変化についての研究動向を検討し、伝統的村落を「経済的には水稲+αを基盤とし、土地を基盤に内部結合的な空間」と規定し、さらに新しい村落を「村落全体での経済的な機能的統合を失いつつも、生活の場としては連続した空間であり、都市的要素と農村的要素の混在化した空間」として捉えることを提案している。日本では古い村落の崩壊や残存が主に取り扱われ、新しい農村像の追究は十分にされてこなかった。そこで例えば空間的な見方や構造主義的視点などを取り入れた、新しい村落研究の発展が期待されている。

さまざまな史料や地図類、文献などから過去の土地利用や景観、村落の組織や構造を復元し、その現代的意義を探ろうとする研究が多く収録されているが、第5章「奈良盆地南部における近世村落の形成と村落のまとまりに関する一考察」において、藤田佳久と大鹿寿は、近世初めの村落は中世から近世村落への転換過程にあるという前提のもとに、文禄検地帳を用い、土地所有規模と入作から村落の内部構造を、水利と村社組織から村落間の関係を検討した。その結果、土地所有規模については村落構成員間に著しい階層性がある村落とそうではない村落、持家率や入作率についても村落によって差が大きいことがわかった。10~20反の中間層が多く、持家率が高く、入作率が低い村落が成熟度が高いとみなされ、そうではないものが村落形成の過渡期にある村落とみなされた。そして、前者は水利関係において優位な立場に立っており、このような村落が中世後期以

来顕著となった集村化過程の中で、集村化の程度の高いものとみなせるという視点が提案された。

第二次世界大戦後、とくに経済の高度成長期前後には、日本の農山村は著しく変化した。島田正彦による第14章「越前海岸の二つの漁村」では、長橋と茶崎という2つの集落における漁業の近年の変化を比較検討している。長橋では小型底曳網は潰滅し、刺網による沖合への発展も成功せず、漁業従事者の減少と高齢化が著しい。そして一本釣漁業は実質的に遊漁船化している。他方、茶崎では揚繰網漁業と大型定置網漁業のほか、19トン型の漁船による沖合イカ釣と、9.9トン型の漁船の刺網・一本釣漁がある。船型を小型化・合理化し、家族経営で収益性をあげ、漁業を存続させてきた。このような2つの漁村の差は、港の状況や漁業資源の豊かさにもよろうが、漁業にかかる意欲の違いが大きくかかわっている。

八木康幸による第16章の「村落墓地の規模について——淡路島を例として——」は、墓地の規模が地域によってどのように差があり、それはどのような意味をもっているかを淡路島で考察したものである。結論として、入会草地や村墓地のような大規模な墓地が海岸部や平野部の村落にみられ、小規模な墓地をもつ村落が内陸丘陵部に多く、その中間の地域には中程度の墓地が分布している。興味深いのはこの墓地の規模の地域差と集落形態の地域差がおおよそ対応することで、大規模な墓地の地域ではコンパクトな集村が、小規模な墓地の地域では散村もしくは小村が卓越する。

比較的小地域の詳細な分析が本書では多くなかで、坂口慶治は第17章で「近畿内帯山地における廃村現象とその自然的条件についての分布論的考察」を試みている。近畿内帯山地は開拓の歴史が古く、自然条件からみて限界に近いところまで村落が立地していた。ところが、生活水準上昇の意欲や生活行動空間の拡大にともない、多くの廃村が生じた。篠山盆地と亀岡盆地、京都盆地北端、近江盆地、加太地峡を結ぶ東西線で南北を二分して比較すると、全面廃村は南部山地15、北部山地135となり、北部に圧倒的に偏在していることがわかった。隔絶障害の強い急崖が存在する山地の山頂部や山腹の小平坦地に立地した村落が最も多く廃村となっており、このような地形は北部山地に多くみられ、さらに北部に多い積雪が相乗効果をもつことが明らかになった。

現代の村落住民の生活行動を扱ったのが最後の2章であるが、藤井正は第24章で「大都市圏縁辺部農村における日常生活圏」を、京都府加茂町の例で検討した。加茂町はもともと奈良市と結びつきの強い農村であったが、1980年代からの住宅開発により、大阪市へ通勤者が増加した。これまでの考え方では、商業・飲食・サービス施設の利用などに基づく日常生活圏も大阪都心との結合関係が強化されるというものであったが、結果として奈良駅周辺や西大寺駅周辺、幹線道路ぞいなどに立地した諸施設も利用され、日常生活圏として大都市圏が多核化しているという。

内容の説明がいささか長くなったが、以上の紹介からも理解されるように、本書で取りあげられている農山漁村研究は多様であり、地理学における農山村研究の幅広さを感じさせる。現代の農山漁村は多様であり、しかも常に変化しているだけに、それをめぐる課題も多い。本書で示されたように、さまざまな側面から異なった視点で分析を蓄積し、印刷物として世に問うことが、今後の地理学の発展のために必要と思われる。

序論でも述べられているように、本書の執筆者の多くは、歴史的観点から農山漁村の研究を進めてきており、このことから多くの論文を編集したものにもかかわらず、全体を通して一定の秩序が保たれている。その一つは、史料や地図、文献の検討が伝統的方法に基づいて手堅く実証的に行なわれていることであろう。それだけにマクロなスケールの研究は少なく、小地域の克明な研究が多い。しかし、そこで得られた知見は、他の地域の状況にも通ずるし、一般化できる可能性も十分もっているように思える。そのような意味では、ここで取りあげられたミクロスケールの研究に基づいて、マクロスケールの研究が今後さらに発展することが期待される。その点では、長年の村落の実証的研究に基づいて、廃村の分布条件を検討した坂口の研究や、農村家屋の発展様式を示した杉浦の研究が魅力的に思われる。

頁数の制限があったためか、執筆者の意図が読者に十分に伝わるかどうか疑問に感じられる論文もみうけられたが、全体として本書が日本の農山漁村研究の発展に貢献することはまちがいない、この分野を志さず研究者の必読書となろう。

(田林 明)

小葉田 淳監修、金坂清則・海道静香編集・執筆
『福井県史 資料編16上 絵図・地図』

福井県 平成2年2月

「解題・解説」B4判 130頁

収載図47枚55点 11,000円

『福井県史』の一冊として『資料編16上 絵図・地図』が刊行された。先年『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』（平成元年3月）として大部な地図集が出ているため、これで我々にとっては福井県（越前・若狭）に関係する古地図資料は、極めて身近で利用しやすいものとなった。

本書は複製された55点の収載図とB4判130頁におよぶ別冊『解題・解説』（その中に挿図として100点以上の地図が写真化されている）から成り立っている。

複製された収載図の内訳は、古代2点（正倉院宝物である東大寺開田図の糞置村、道守村図）、近世34点（幕府撰国絵図、城下絵図、町絵図、村絵図、川絵図等）、近現代19点（明治期の地形図・地籍図、空中写真）の55点から成り、特に空中写真を採用して同一地域を比較させることは、この種の書物としてはめずらしいが、歴史の証言者としてそれが極めて良好な“古地図”であることをあらためて教えてくれる。

55点の収載図を通して見ると、中世の地図を欠くとはいえ（別冊『解題・解説』には太良荘樋插図と坂井郡河口・坪江荘近傍図、白山参詣曼荼羅が挿図として載っている）、時代的には奈良時代から昭和50年代までの遠大な時間的範囲におよぶ地図が概観できることになる。このことは対象地域が越前・若狭であればこそ可能なことではあるが、それだけでは十分ではなく、本書の形に仕上げるまでの編著者の努力なしには不可能であることはいうまでもない。また、この収載図は越前・若狭の地図史の時間的経緯が、つまりはわが国の地図史のそれと重なり合っていることにも気付かせてくれるのである。

編著者は別冊『解題・解説』の中で、本書の目的を以下のように述べる。

「その一つは、福井県及びその母体となった越前・若狭二国の歴史の理解に役立つよう精選した絵図・地図・空中写真を、形式の面でも大きさの面でも見やすく、利用しやすい形で複製すること。第二は、その鑑賞や活用にとって参考となるような情報や素材を提示すること。そして第三は、このようなこ